

学校教育実践学研究, 2019, 第25巻, 109 - 118頁

大学院生によるアメリカの小中学校での 体験型海外教育実地研究報告Ⅻ

深澤 清治・松浦 武人・松宮 奈賀子・渡邊 巧・
伊藤 健志朗*・榎原 朱梨*・小松 薫穂*・福田 麟太郎*・藤井 志保*・
宮島 侑希*・八島 恵美*・渡部 真吾*

(2018年12月10日受理)

A Report on Overseas Teaching Practicum by Graduate Students
in Elementary/Secondary Schools in the United States (Ⅻ)

Seiji Fukazawa, Taketo Matsuura, Nagako Matsumiya, Takumi Watanabe,
Kenshiro Ito, Akari Enohara, Yukiho Komatsu, Rintaro Fukuda, Shiho Fujii,
Yuki Miyashima, Emi Yashima and Shingo Watanabe

This paper reports on the overseas teaching practicum in the U.S., which was supposed to be the 12th time this year. Eight students joined this year's program and they prepared for the practicum in the U.S. They met regularly to discuss the lesson plans and deepen their understanding on how to create a lesson and what scaffolding steps they should prepare for conveying messages to American children who know little about Japanese culture and having different background from us. Unfortunately, just a few days before the departure, we had to give up our visit to the U.S. since there was a high chance of a hurricane hitting the area we were to visit. Though we could not make our visit in September, instead we held a forum in November and exchanged discussion on the impact of the program to the participants and the schools which accept us. The details of the lesson plans and the forum are reported in this paper.

Key words : global education, overseas teaching practicum, crosscultural understanding

1 はじめに

広島大学グローバル・パートナーシップ・スクール・プロジェクト研究センター (Hiroshima University Global Partnership School Center 以下 GPSC) は広島大学大学院教育学研究科の共通選択科目である「体験型海外教育実地研究」を通して毎年、前期に海外教育実習を企画・実施している。本稿は第12回目を迎えた学生派遣の研究報告である。

本年度は同研究科博士課程前期の大学院生8名が参加し、アメリカの小中学校での実習に向けた授業開発、授業発表に取り組んだ。下記の概要に詳述するように、今年プログラムも例年通り4~8

月の事前教材研究に始まり、9月14日~24日の現地での教育実地研究(米国ノースカロライナ州グリーンビル市内にある3つの公立小・中学校での授業観察及び教育実習)、広島大学大学院教育学研究科との協定校であるイーストカロライナ大学での大学院授業への参加と現地院生との交流、州都ローリー市内のチャーター・スクール(州から認可された地域団体などが自主運営する公立初等中学校)であるイクスプローリス小学校・中学校での授業見学、校長・教員・生徒ガイドとの交流などを予定していた。その後、現地での教材収集や他文化理解のためのフィールド調査、そして帰国後の事後研究による教材完成と最終レポート

* 広島大学大学院教育学研究科博士課程前期

の作成，そして全員による研究成果発表会も予定されていた。

しかしながら，今年度はノースカロライナ州，そして西日本を襲った自然災害によって，これまで一度もなかった計画の中止，変更を余儀なくされた。9月中旬にノースカロライナ州東岸に接近したハリケーン・フローレンスが私たちのグループの到着時に現地を直撃する可能性が高いことがわかり，直前まで情報収集を続けた。最終的に中止の判断に踏み切ったのは，現地コーディネーターのウォレン教授からの次のメールであった。

Dear friends – I don't want to “dis-invite” you to Greenville but I think I need to. Although the hurricane is expected to make landfall Thursday or Friday, it is the flooding that poses the most significant issue for us and that takes a few days to start.... I know this is a hard decision for you but I don't think a trip to Greenville this week would be a good idea.
Sandra (アメリカ現地時間 22:54 EST)

これを受けて，翌9月11日(月)渡航前最終打合せにおいて，計画の中止を参加予定者に伝えた。担当教員はもとより，これまで教材収集，指導案作成，英語での模擬授業などに多くの時間をかけてきた参加院生にとっては最も苦しい選択となったが，参加者全員の安全確保は最優先事項であり，やむを得ない選択であったと思われる。

合わせて，これに先だって指導案検討の機会をかねた「第14回学校間交流国際フォーラム」(7月14日開催予定)も西日本集中豪雨により東広島市内も甚大な被害を受けたため，中止に踏み切った。なお，その後，本フォーラムは後述の通り，11月11日(日)にアメリカから協定校及び実習予定校の教員3名を招いて実施することができた。

以下では，今年度実施されるはずであったGPSCの活動である「体験型海外教育実地研究」の概要と参加予定者の授業計画案，及び「第14回学校間交流国際フォーラム」について報告する。

2 2018年度「体験型海外教育実地研究」の概要

(1) 全体日程

2018年度，本授業科目の実施状況(全体日程)は以下のとおりであった。

4月5日(木) 本授業の概要と計画説明

4月26日(木) 授業研究テーマ事例の考察および渡航のための諸手続きの確認

5月15日(火) 授業研究テーマ案の交流・設定

5月20日(日) イーストカロライナ大学の学生との交流(広島案内)

6月11日(火) 学習指導案の検討(1)

6月13日(木) 学習指導案の検討(2)

7月5日(木) 学習指導案(英語版)の検討(1)

7月26日(木) 学習指導案(英語版)の検討(2)

8月1日(水) 学習指導案(英語版)の検討(3)

8月24日(金) 授業の準備状況の確認・渡航のための諸手続き

9月4日(月) 授業の準備状況の確認，教材集・報告書・報告会についての確認，渡航に関する書類提出

9月11日(月) 渡航前最終打合せ

11月11日(日) 第14回学校間交流国際フォーラム参加

(2) 渡航・活動計画

本年度の渡航・活動計画を以下の通りであったが，渡航はハリケーンのため中止となった。

9月14日(金) 広島出発，成田泊

9月15日(土) 成田出発，米国ノースカロライナ州ローリー到着

9月16日(日) グリーンビル到着，授業準備および授業打合せ

9月17日(月) グリーンビル現地学校訪問(観察)，イーストカロライナ大学教材開発センター見学，同大学学生との交流

9月18日(火) グリーンビル現地学校訪問(授業実施)

9月19日(水) イーストカロライナ大学の授業参加，ローリーへ移動

9月20日(木) イクスプロールズ中学校・小学校見学

9月21日(金) ローリー市内(博物館等)研修，ワシントンへ移動

9月22日(土) ワシントン(スミソニアン博物館等)研修

9月23日(日) ワシントン出発，機内泊

9月24日(月) 広島到着

(3) 参加者の学校配置計画

本年度の「体験型海外教育実地研究」の授業には8名の大学院生が参加した。

参加院生の現地での学校配置並びに引率教員は以下のように計画していた。

【エルムハースト小学校(K-5)】

参加者：宮島侑希・八島恵美・小松薫穂

引率者：松宮奈賀子

【ウォールコート小学校 (K-5)】

参加者：榎原朱梨・伊藤健志朗・福田麟太郎

引率者：松浦武人

【C.M. エッペス中学校 (6-8)】

参加者：渡部真吾・藤井志保

引率者：深澤清治（・小原友行）

3 参加者の教材開発・報告

参加大学院生（8名）は、日本での事前学習により、テーマ・題材等の設定から和文指導案の作成並びに英文学習指導案の作成を行うとともに、教材・教具の準備、資料の作成を行った。参加者の開発した授業の「ねらい」、「概要」、「教材開発・検討を通した自己変容」についての報告を以降に示す。

【授業 A】 学習開発学専攻 八島恵美

1. 授業テーマ

羽根つきを楽しもう（異文化理解）

2. 対象学年：第2学年

3. 授業のねらい

お正月遊びである「羽根つき」の起源は神事である。羽根には無患子（むくろじ）が使われており、子どもが病気にならないようにという願いが込められている。羽根つきは、打ち合いを競うといったスポーツ的な意味合いではなく、お互いの健康を願って長く打ち続けるものであったという。

そこで、「羽根つき」について紹介し、実際に羽根つきを楽しんでもらいたい。そして、体験を通して、自分たちの生活においてもお互いのことを思いながら活動していることについて振り返ることを目指す。

4. 授業の概要

- (1) 日本の伝統的な遊び体験と、それを通して日本の小学2年生との交流を行うことを伝える。
- (2) 「羽根つき」は、日本のお正月の伝統的な遊びであり、子どもの健やかな成長を願うものであること、お互いの健康を願って、長く打ち続けるものであることを伝える。
- (3) 日本の子どもたちからの活動の様子を伝える写真やビデオを見せて、活動に目的と意欲をもたせる。
- (4) 羽根つきを楽しみながら、長く続けるためには相手のことを思って、打ちやすいところに打ち返す必要があることを体験する。
- (5) 羽根つきを通して、「相手のことを思って行動

する」ことについて考えさせる。できれば、「相手のことを思って」という視点で自分たちの生活を振り返らせる。

- (6) 学習の記念に羽子板に名前を書く。8枚の羽子板は日本の子どもたちに届けること、手元に残る8枚の羽子板でこれからも羽根つきを楽しんでほしいことを伝える。

5. 教材開発・検討を通した自己変容

アメリカの子どもたちが日本の文化を学ぶことの価値は何か、という視点で教材開発を行った。また、文化や個人を尊重することについて細心の注意を払い授業づくりを行った。検討会においては、子どもを共感的に評価し、それを伝えることを繰り返すことで子どもたちを育成する、というアメリカのスタイルについて学ぶことができた。

【授業 B】 教職開発専攻 小松薫徳

1. 授業テーマ

和紙について知ろう（異文化理解）

2. 対象学年：第4学年

3. 授業のねらい

和紙とは日本で古来から作られ使用されている伝統的な紙である。今日では洋紙が主に使用されているが今もなお、扇子等には和紙が使用されている。これは、和紙の持つ特徴が関係している。そこで、和紙の制作過程を通して、和紙と洋紙の違いや和紙の良さに触れてもらいたいと考える。

日本の伝統品等に使用されている「和紙」について、実際に見たり触ったりすることを通して、和紙の良さを楽しむことができるようにすることを目的とする。

4. 授業の概要

- (1) おみくじや扇子などの和紙を利用して作られたものを実物で提示し、学習への興味を高める。
- (2) 共通して紙（和紙）が使われていることを伝え、学習のテーマを明確にする。
- (3) 和紙の特徴を制作過程の動画を通して、和紙の特徴に触れていく。
- (4) 和紙の水に弱い特性を生かした遊び（金魚すくい）を行い、日本文化に触れる。

5. 教材開発・検討を通した自己変容

教材開発・検討を通して自己変容したと考える点は、教材を考える視点である。アメリカの小学生を対象に授業を行うということで、日本文化を知ってもらいたいと思い、日本文化にかかわる教

材を選択した。しかし、向こうの小学生にとって日本文化とは未知なるものであり、私の中では十分であろうと思うことでより細かく説明をしなければならぬと改めて思った。

これは決して今回に限らぬと感じた。日本の小学生を対象とした時も、子供たちそれぞれで知識の定着度はもちろん、育ってきた環境が異なり、背景に持っている常識も異なる。したがって、丁寧な指導を行おうと思うと、教師である自分自身の常識にとらわれず、より細かく物事を見ていくことが大切であり、今回の教材開発・検討から改めて学んだことである。

【授業 C】 教職開発専攻 伊藤健志朗

1. 授業テーマ

日本の木の文化を楽しもう(異文化理解)

2. 対象学年：第5学年

3. 授業のねらい

本単元のねらいは、日本とアメリカの文化の違いについて触れたり日本の木造文化を体験したりすることを通して、日本の伝統的な木工技術について知り、日本の伝統技術の繊細さと美しさを感じることができるようにすることである。

4. 授業の概要

(1) 日本とアメリカの建造物の比較クイズ

児童にとって外国人である授業者に対して不安を取り除くとともに、本時への興味を高めるために、建造物の写真を用いた日本の紹介を含む自己紹介を行う。

(2) 日本の伝統的木造建築の紹介

木造建築の美しさや頑丈さを感じることができるようにするため、世界最古の木造建築である法隆寺や、釘をほとんど用いずに架けられた錦帯橋について紹介する。

(3) 日本の伝統的な大工技巧との出会い

災害に耐える家を建てたり、つなぎ目が分からないほど繊細な家具を造ったりする、日本の木工技巧について知るために、組み木の技術を用いて物作りを行う大工の様子を映像で紹介する。

(4) 割り箸だけで橋をつくる活動

日本の木造文化に触れることができるようにするため、組み方を工夫しながら割り箸だけを使って実際に小さな橋をつくる体験をする。

(5) 授業のふりかえり

日本の文化についての感想を述べ合ったり、自国の文化や生活を見つめなおしたりする時間を設定

する。

5. 教材開発・検討を通じた自己変容

まず、人とかかわる楽しさを改めて実感した。ECUの学生とかかわる中で、言語の壁があってもコミュニケーションをとることの楽しさを感じることができた。

また、言語の異なる児童を対象に授業を考えることを通じて、題材の工夫や理解のための支援など、手だての大切さを改めて実感した。これは日本の児童に対しても同様であり、ユニバーサルデザインの視点を意識して授業づくりを行っていきたい。

【授業 D】 学習開発学専攻 福田麟太郎

1. 授業テーマ

〇〇なゴジラの音楽を作ろう(音楽科)

2. 対象学年：第5学年

3. 授業のねらい

イメージをもとに編曲することを通して、音色やリズムの理解を深める。

4. 授業の概要

(1)アイスブレイクとして、アニメや映画のテーマ音楽からその音楽が表す人物を当てるゲームをする。

(2)様々な帝国のマーチ(ダースベイダーのテーマ)を聴きその違いに気づく。

そこから、旋律の流れは同じでも、音色やリズム、演奏の速さによって感じ方が変わってくることに気付かせる。

(3)ゴジラの基本情報を紹介したうえで、その映画で使われていたテーマ音楽の基本となる旋律を教え、その旋律を基に「〇〇なゴジラ」の曲を作る。作る際には4人一組となって活動する。

(4)それぞれのグループが作った「〇〇なゴジラ」を聴き、感想を共有する。そして、振り返りを記入する。

5. 教材開発・検討を通じた自己変容

私は、昨年もこのプログラムに参加したため、そこでの成果と課題を踏まえて、今年は授業開発を行った。

所属先では小学校での音楽科のことについて研究しつつも、一度も音楽科の授業をしたことがなかったため、この機会を使って音楽科として成り立つ授業をしてみようと思い、音楽の授業を構想した。

その際、気を付けたことは、楽しい1時間の授業をすることと、その楽しかった時間で何を学ん

だのかを子どもたちが実感できる授業にすることである。そのため、子どもたちの考えが音楽づくりを通して見えるように、音楽を介しながら子どもたちと積極的に会話していこうと考えていた。そして、作った音楽や子どもたちの感想を記録に残そうと考えていた。

最後に、この授業実践で自分自身がさらに成長できることを楽しみにしていたが、実践することなく終わってしまいとても残念に思う。

【授業 E】 教職開発専攻 宮島侑希

1. 授業テーマ

季節の手紙を送り合おうー野菜判子を用いた絵葉書の作成を通してー(異文化交流)

2. 対象学年：第5学年
3. 授業のねらい

本授業では、日本とアメリカの小学5年生がそれぞれの国で食べられている野菜を用いて作った野菜判子を使って季節の手紙を作成し、送り合うことで異文化交流を行う。活動全体を通して、それぞれの国にある季節の手紙の文化や食材(そこから感じる食文化)に触れ、お互いの良さを認め合うこと、他国の児童に親しみを持つことが出来るようにすることを目的とする。

4. 授業の概要

(1) 日本の小学校での授業実践

アメリカの児童に送る残暑お見舞い(日本の野菜判子を用いて絵葉書を作成しその下に文章を書くものとする)の作成を行う。

(2) アメリカの小学校での授業実践

日本の児童が作成した残暑お見舞いを受け取り、その文化に触れた後、日本の児童に送る Season letter(アメリカの野菜判子を用いて作られた野菜判子を用いて絵葉書を作成しその下に文章を書くものとする)の作成を行う。また、それぞれの国にある季節の手紙の文化や食材(そこから感じる食文化)の相違点について考える活動を通してお互いの良さを認め合うことが出来るようにする。

(3) 日本の小学校での授業実践

アメリカの児童が作成した Season letter を受け取り、その文化に触れる。また、それぞれの国にある季節の手紙の文化や食材(そこから感じる食文化)の相違点について考える活動を通して、お互いの良さを認め合うことが出来るようにする。

5. 教材開発・検討を通じた自己変容

4.(1)の日本の小学校での授業実践しか行うことが出来なかったものの、教材開発・検討を通して、日本の文化について考えたり、外国の文化について自ら進んで調べたりして、学ぶことが出来ました。また、ノースカロライナ大学の学生の方々と関わらせていただいたことがきっかけで、初めて外国の文化を身近に感じる事が出来たと同時に、より主体的に英語の学習を行うことが出来るようになりました。貴重な学びの機会を与えていただきありがとうございました。

【授業 F】 学習開発学専攻 榎原朱梨

1. 授業テーマ

ハンコをつくろう(異文化理解)

2. 対象学年：第5学年
3. 授業のねらい

日本には、さまざまな日本特有の文化が存在している。その中で日本に深く根付いている文化の一つである「ハンコ」を取り上げることで、アメリカの子どもたちが日本文化に興味をもつようになるとともに、アメリカと日本における文化の違い、また子どもたちが自文化を改めて認識することができるのではないかと考える。本授業では、①ハンコの役割を考えること ②また実際にハンコ作りをすることで日本文化に触れてもらうことの2点をねらいとする。

4. 授業の概要

- (1)ハンコを実物で提示するとともに、ハンコが実際に押されている書や絵画の写真を提示し、ハンコはどのような役割なのかについて考える。
- (2)アメリカでハンコの役割を担っているものは何に当たるのかを考える。また、同時にそれぞれ他の人との違いを出すためにどのような工夫をしているのかを考える。
- (3)ハンコの役割を理解した上で、実際にハンコを作ってみる。ハンコの文字は、カタカナを使用することにする。
- (4)こちらがあらかじめ指定した漢字の中から自分の気に入ったもの一つを選び、ポストカードに書きうつし、自分で作ったハンコを押す。

5. 教材開発・検討を通じた自己変容

教材開発をするにあたり、自分自身が改めて日本の文化とはどういうものなのか、日本にはあるがアメリカにはないものとはどういうものなのかという日常生活のなかではあまり目を向けないことについて考える機会をもつことができたと考え

る。また、教材検討をしていくなかで自分は「この文化はあまりアメリカでは知られていないもの」だと認識していても向こうの文化のなかでよく浸透しているものであるという指摘を受けたりすることがあった。このような経験を通して、自分のよく知っている日本文化であってもきちんと理解できていないことや知らないことが多々あることに気づくことができたように思う。また、自分が勝手に抱いているアメリカのイメージが今回は教材開発・検討するだけに留まってしまったが、少し変容したように感じる。

【授業 G】 教職開発専攻 渡部真吾

1. 授業テーマ

筆ペンを使って日本の子どもたちに手紙を書こう（異文化理解）

2. 対象学年：第7学年
3. 授業のねらい

本授業では、アメリカの子どもたちに日本の子どもたちに向けて手紙を書いてもらう。使ったことのない筆ペンで漢字を書かせることによって、アメリカの子どもたちに日本の文化を伝えたい。それが、アメリカの子どもたちと日本の子どもたちの異文化理解と交流につながると考える。

この活動では、次の2点をねらいとする。まず、筆ペンを使って日本の生徒に漢字と手紙を書き、日本の文化を経験させる。そして、手紙の交換を通して、アメリカと日本の文化の違いを理解させる。以上の2点が身に付くように指導を行う。

4. 授業の概要

- (1) 挨拶、自己紹介
- (2) 漢字について教える
 - ・パワーポイントを使って漢字ゲームを行い、いくつかの漢字の意味を確認する。
- (3) 本時の目標を確認する
 - ・筆ペンの紹介と「平和」「友達」の意味や思いを伝える。
 - ・日本の生徒からの手紙を渡して、読ませる。
- (4) 筆ペンで漢字を書く練習をする
 - ・教師による実際の書道を見せる。
 - ・「平和」「友達」を筆ペンで書かせ、違いや筆のよさを体感させる。
- (5) 日本の生徒に手紙を書く
 - ・日本の生徒に向けて、筆ペンで英語のメッセージを書かせる。
 - ・「平和」または「友達」がキーワードになる

ようなメッセージになるよう指示する。

(6)まとめ

- ・返信用の手紙を集める。
 - ・書いた手紙は日本の生徒に渡すことを伝える。
5. 教材開発・検討を通した自己変容
 - 3点ある。まず、日本の筆や漢字の文化をアメリカの生徒に伝えるために、日本文化を学び直す契機となった。次に、手紙を通して交流をさせようとする活動は相手意識が高まり、主体的な学習になりやすいと感じた。最後に、英語と向き合うことで、英語はもちろんのこと語学に対する自己啓発の意識が高まった。

【授業 H】 学習開発学専攻 藤井志保

1. 授業テーマ

「着物」浴衣を楽しもう（家庭科・異文化理解）

2. 対象学年：中学校 第2学年
3. 授業のねらい

日本の伝統的な衣文化である「着物」について、実際に見て、触れて、着て、感じ、考える。

- ①着物の概要を知り、着方を学び、実際に着る。
 - ②着物の立ち居振る舞いについて体験し、考える。
 - ③「洋服と着物」を比べて感じたことを共有する。
- ##### 4. 授業の概要

- (1)【見る】実物の着物（浴衣）を見て、着物が日本の伝統的な衣文化であることや、どのような場面で着用されているかなどを知る。
 - (2)【触れる】ペアで浴衣・帯・ひも一式を受け取り、実際に触れてどのようなものか知る。平面的な布であることに注目し、ひもや帯で着付けていく過程を知る。
 - (3)【着る】着付けの手順や大切な点を確認しながら、ペアで協力して実際に着装する。
 - (4)【感じる】着装しての立ち居振る舞いを実体験して、着心地などの感想を持ち、日常着との違い、他者（クラスの仲間）の姿を見ての発見など、その体験から感じたことを交流する。
 - (5)【考える】日本の子どもたちの着物についての考えを書いた「メッセージ入りの扇子」を受け取る。その扇子を手にして、着物の特徴をさらに知る。浴衣の着装を楽しみながら、日本の中学生向けのビデオレター（アメリカの中学生の感想・考えを入れた）を作成する。
5. 教材開発・検討を通した自己変容
 - 英語力のない自分が、英語で授業をするという大きなチャレンジである。いかにしてシンプルかつ明確に伝えるかを悩んだ。英語力をカバーする

ための工夫が必要である。何を題材にするかに始まり、授業内容に関して、実物提示、掲示物準備、師範の方法、ジェスチャーの工夫、声の強弱や表情、日本の中学生からのプレゼントの工夫、時間配分そしてどの場面でもう問うかなど考える要素は山のようにあった。英語に苦戦しつつ「アメリカの中学生はどんなまなざしでこちらを見るのだろう」とドキドキワクワクしながら準備を重ねた。これまで授業準備の際に、ここまで伝える方法を悩んだことはなかったかもしれない。言語の壁がある中で、子どもたちが生き生きと活動するにはどうしたらよいかを模索した。この機会をいただけたことに感謝し、今後の授業に生かしたい。

本年度、参加院生が開発した授業は、そのねらいと学習活動から、次のように分類することができる。

ア 日本の文化の理解と体験をねらいとする授業 (A, B)

イ 日本の文化の理解を踏まえた創造活動をねらいとする授業 (C, D, F)

ウ 日本の文化を媒介として日米の児童生徒の交流をねらいとする授業 (E, G, H)

また、参加院生の「教材開発・検討を通じた自己変容」の報告から、体験型海外教育実地研究の教材開発・検討が、院生にとって以下のような自己変容を促すものであることが分かる。

- ・ 自国の文化についてあらためて深く認識する。
- ・ 子どもの立場にたって教材の価値を再考する。
- ・ 非言語コミュニケーションのあり方を工夫する。
- ・ 英語を主体的に学ぶ意欲をもつ。
- ・ 新たな授業観（児童生徒が楽しさとともに学習内容を実感することができる授業を構成する）を形成する。

これらの自己変容は、米国における授業を開発し検討を重ねる上でもたらされたものであるが、将来、院生が日本の学校で授業開発・実践を行う上でも大切な視点となるものである。

4. 第14回学校間交流国際フォーラムについて

2018年11月11日（日）に、広島大学大学院教育学研究科において、第14回学校間交流国際フォーラムを開催した。以下、本章では、フォーラムの概要を述べる。

フォーラム全体のテーマは、グローバル時代に求められる次世代教員養成（Next Generation Teacher Education in a Global Era）であった。

第1部では、「海外体験が次世代の教師に与え

るインパクト」について、GPSCパートナー校のイーストカロライナ大学のサンドラ・ウォーレン（Sandra Warren）氏から「GPSC—21世紀のグローバルな教育者と学習者のためのモデル（Global Partnership School Center: A Model for 21st Century Global Educators and Learners）」と題した基調報告がおこなわれた。

報告では、「デジタル時代における優秀な教師の特質」、「教育者のグローバル・コンピテンス」、「ブルームの改定版タキソノミー」が紹介され、それらの視点から「体験型海外教育実地研究」の特質が説明された。大学院生が現地（米国の初等・中等学校）で実習をおこなうことの意義が述べられた。

質疑応答では、「タキソノミーの中で、クリティカルシンキングはどの段階に位置づけるのか」「ディスポジション（disposition：教師としての構え）は、どうやって評価するのか」といった質問がフロアから出された。ウォーレン氏は、ディスポジションは評価すべきではないこと、海外体験を通して大学院生（教職志望者および現職教員）に「他者を尊重する姿勢」や「他者と協力する姿勢」といったディスポジションを育てることの重要性を述べた。

第2部では、「体験型海外教育実地研究体験が与えたインパクト」について、日米の双方から話題提供が行われた。



図1：アメリカでの実習体験報告の様子

日本側の話題提供者は、2017年度参加者の中山貴司氏（広島大学附属東雲小学校）、古川恵理氏（広島市立長束小学校）、塩田佐恵氏（三次市立三次中学校）であった。3氏からは、現地でおこなった授業の概要だけでなく、体験が自身に及ぼした影響や変容が述べられた。英語で話題提供をおこなう参加者の姿も見られ、体験型海外教育実地研究

の学習効果が、現在にも生かされている様子を確認することができた。

米国側の話題提供者は、ノースカロライナ州エルムハースト小学校のコリーン・バート (Collen Burt) 氏 (校長), ジョーダン・スミス (Jordan Smith) 氏 (第3学年担任) であった。両氏からは、体験型海外教育実地研究の受入が、同校の児童および教職員にもたらした意義が述べられた。特に児童に見られたよい成果として、以下の2点が強調された。

- 1) 日本からの実習生の英語での説明が時に拙く理解が難しいこともあるが、児童は忍耐強く耳を傾け、時に伝えたい内容を自分たちなりに解釈して伝達しようとする姿が見られた。この姿は通常の担任教師による授業では見ることができないものであった。
- 2) 児童にとっては、日本文化に触れることで、アメリカ合衆国のアイデンティティを振り返るきっかけとなった。

教職員にとっても、日本の大学院生と関わることで、日々の授業を省察するきっかけとなったことが紹介された。具体的には次の2点が紹介された。

- 1) 実習生が指導する内容を以下に学級の児童の日常や既知の情報と結びつけ、橋渡しができるかを考え、支援の在り方を考える契機となった。
- 2) 日米の授業の構造の共通点や相違点を観察することで、普段の授業づくりを振り返り、特に文化も教育と深く関係することを改めて確認するきっかけとなった。

また、今後に向けて、体験型海外教育実地研究プログラムの改善案も提案された。具体的には、プログラム開始時の15年前には無かったデバイスやアプリの活用によって、受入校の教員と事前の打ち合わせをおこなうことや児童にビデオメッセージを届ける等の可能性も示唆された。

質疑応答では、「子どもの語彙不足が生じる原因」、「日本と米国の授業構造の違い」について活発な意見交換が行われた。子どもの語彙不足に関して、日本側からはスマートフォンの普及による読書量の低下が挙げられた。米国側からは、貧困や社会環境の変化によって、家庭での子どもと家族の関わり (言語をとおしたコミュニケーションを含む) が不足していることが背景にあるといった指摘が挙がった。



図2：登壇者による議論の様子

また、前GPSCセンター長の小原友行氏は、「グローバル・パートナーシップ」をもった人材を育成していくことの重要性を、自身の日米における実践を報告することで提起した。

5 おわりに

本年度の計画は、予期せぬ自然災害によって日米双方において実施が不可能となった。作成された授業テーマや計画はいずれも大変興味深いものであり、実施することができたらきっと現地の児童・生徒、そして学校教職員にも大きなインパクトを与えることができたであろう。11月のフォーラムにおいて実習受け入れ校の2名の先生が話されたように、参加者の授業は単に日本文化の紹介にとどまらず、現地の子供たちにとっても自らの文化を振り返る機会になったこと、また教職員にとっても自らの教育、文化、社会を改めて見直す機会になったことは、本プロジェクトの大きな成果であろう。

次に、来年度の参加者に向けて授業設計へのヒントをあげるとすれば、日本のことを全く理解、経験したことのない学習者にどのように向き合うかを考えることである。それは、日本をテーマとして題材を選び授業を設計していく過程で、自分の選んだ教材に対してどのように他者意識をもって向き合うかということである。たとえば、日本の「こけし」や「すもう」を説明しようとする際に、“kokeshi or traditional Japanese doll”, “Sumo or traditional Japanese sport”と説明するだけで、それがどのくらいのイメージを相手に想起させることができるであろうか。今年も指導案検討の初期にはそのような指摘がいくつか見られた。海外教育実習においては常に起こりうる課題であろう。これは日米という現代的枠組みだけ

でなく、日本において近未来に起こりうる多言語文化社会を想定した学校教育を考えるとときに避けて通れない課題のひとつであろう。

最後に一つうれしい報告がある。今年度9月の体験型は中止となったが、その後、参加院生の強い希望により、現地学校と連絡、交渉した結果、2019年3月初旬にノースカロライナ州ローリー市の学校で実習を実施できる運びとなった。参加者各自にとって個人的な計画もあり、全員が再参加できないことは残念なことであるが、「体験型海外教育実地研究」が今年度も継続できたことに対し、日米双方の関係者のご尽力にこの機会を借りて感謝申し上げます。

〔参考文献〕

- 小原友行・深澤清治・朝倉淳・神山貴弥ほか「大学院生によるアメリカの小中学校での体験型海外教育実地研究」, 広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター編『学校教育実践学研究』第13巻, 2007, pp.43-56。
- 小原友行・深澤清治・朝倉淳・神山貴弥ほか「大学院生によるアメリカの小中学校での体験型海外教育実地研究Ⅱ」, 広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター編『学校教育実践学研究』第14巻, 2008, pp.39-53。
- 小原友行・深澤清治・朝倉淳・松浦武人ほか「大学院生によるアメリカの小中学校での体験型海外教育実地研究Ⅲ」, 広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター編『学校教育実践学研究』第16巻, 2010, pp.95-104。
- 小原友行・深澤清治・朝倉淳・松浦武人・松宮奈賀子ほか「大学院生によるアメリカの小中学校での体験型海外教育実地研究Ⅳ」, 広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター編『学校教育実践学研究』第17巻, 2011, p.155-168。
- 小原友行・深澤清治・朝倉淳・松浦武人・松宮奈賀子ほか「大学院生によるアメリカの小中学校での体験型海外教育実地研究Ⅴ」, 広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター編『学校教育実践学研究』第18巻, 2012, pp.129-140。
- 小原友行・深澤清治・朝倉淳・松浦武人・松宮奈賀子ほか「大学院生によるアメリカの小中学校での体験型海外教育実地研究Ⅵ」, 広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター編『学校教育実践学研究』第19巻, 2013, pp.259-269。
- 小原友行・深澤清治・朝倉淳・松浦武人・松宮奈賀子・植田敦三ほか「大学院生によるアメリカの小中学校での体験型海外教育実地研究Ⅶ」, 広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター編『学校教育実践学研究』第20巻, 2014, pp.161-181。
- 小原友行・深澤清治・朝倉淳・松浦武人・松宮奈賀子・植田敦三ほか「大学院生によるアメリカの小中学校での体験型海外教育実地研究Ⅷ」, 広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター編『学校教育実践学研究』第21巻, 2015, pp.143-161。
- 深澤清治・小原友行・朝倉淳・松浦武人・松宮奈賀子ほか「大学院生によるアメリカの小中学校での体験型海外教育実地研究Ⅸ」, 広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター編『学校教育実践学研究』第22巻, 2016, pp.251-268。
- 小原友行・深澤清治・朝倉淳・松浦武人・松宮奈賀子ほか「大学院生によるアメリカの小中学校での体験型海外教育実地研究Ⅹ」, 広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター編『学校教育実践学研究』第23巻, 2017, pp.103-116。
- 朝倉淳・深澤清治・朝倉淳・松浦武人・松宮奈賀子ほか「大学院生によるアメリカの小中学校での体験型海外教育実地研究Ⅺ」, 広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター編『学校教育実践学研究』第24巻, 2018, pp.131-148。